アンダーブラック

目次

[Phase.0]暴かれた秘密と沈黙の姉 2
[Phase.1]性癖を読み上げられる恥辱と苦しい弁明 3
[Phase.2]シロムの視線と姉の肖像 5
[Phase.3]凍りつく空気と唐突な提案 6
[Phase.4]膨らむ妄想と秘められた渇望 7
[Phase.5]現実を忘れるほどの甘美な肯定 8
[Phase.6]隠し持っていた道具と、残酷なすれ違い 9
[Phase.7]錯綜する思惑と沈みゆく意識 10
[Phase.8]反転した悪夢 12
[Phase.9]ブリーフ観察と残酷な現実 14
[Phase.10]逆転の理不尽と迫る恐怖 16
[Phase.11]閃撃のカンチョー 17
[Phase.12]肛門に刻まれるカンチョーの残響 20
[Phase.13]ハサミでブリーフを切られて直視される肛門 22
[Phase.14]調合される処方と直腸への切っ先 24
[Phase.15]屈服の懇願と冷徹な切断線 26
[Phase.16]蹂躙のグリセリン充填と鳴り響く終止符 28
[Phase.17]初浣腸の快感、だけじゃなく。 31
[Phase.18]鳴り響く直腸の旋律と臨界への胎動 32
[Phase.19]限界の20分間と蠢く本音 35
[Phase.20]姉の手で射精も便意も管理されちゃう 37
[Phase.21]寸止めのループと錯乱する括約筋 38
[Phase.22]狂乱の二大欲求と再来するガラスの切っ先 41
[Phase.23]二度目の浣腸で絶頂射精 43
[Phase.24]二重充填の臨界と溢れ出す秘液 45
[Phase.25]決壊の茶褐色うんちと解放の熱流 48
[Phase.26]排便反射の生理学と宿便の強烈な匂い 50
[Phase.27]揉み出されるうんちの残りと恥辱の講義 52
[Phase.28]自発の排便と最期の残響 53
[Phase.29]蹂躙の残響と肛門ケア 56
[Phase.30]浣腸プレイ後の茶会と不屈の虚勢 57

[Phase.0]暴かれた秘密と沈黙の姉

学校での退屈な授業を終え、シロムは重い足取りで自宅へと帰ってきた。

玄関で靴を脱ぎ、いつものように自分の部屋へと直行する。

ドアノブに手をかけ、やはり、いつものようにそれを回した。

ギィ、と微かな音を立てて扉が開く。

そこには、日常の風景があるはずだった。

しかし、部屋の中央には信じられない光景が広がっていた。

「……ハイム？」

思わず、その名前を口にする。

ベッドの縁に腰掛けていたのは、双子の姉であるハイムだった。

彼女は制服姿のまま、静かに目を閉じている。

怒っているわけでも、笑っているわけでもない。

ただ、なにかを深く考えているかのような、不気味な沈黙を保っていた。

そして、シロムの視線は彼女の足元に引き寄せられる。

そこには、見つからないように厳重に隠していたはずの『いかがわしい本とゲーム』が、山の如く高く積み上げられていたのだ。

全身の血の気が引くのがわかった。

「なんで僕の部屋にいるんですか」

心臓が早鐘のように打ち始めるが、シロムは必死に動揺を押し殺した。

ここで慌ててしまえば、完全に自分の負けを認めることになるからだ。

「おかえり、シロム」

ハイムはゆっくりと閉じられていたまぶたを開いた。

冷たく感情の読めない瞳が、シロムを真っ直ぐに射抜く。

「ただいま、じゃなくて。人の部屋に、勝手に入らないでくれますか」

努めて冷静な、丁寧な口調を装ってシロムは言葉を紡いだ。

声が少し震えそうになったが、なんとか堪える。

「そう……」

短く、温度のない声が部屋に響いた。

彼女の視線はシロムから、足元に積まれたいかがわしい本の山へと移動する。

「ノックくらいするのが礼儀ですよね」

シロムは姉に対し自らの非を認めることなく、あくまで不法侵入を咎めるというスタンスを崩さずに追及する。

なんとかこの不気味な空気を打破したかった。

「ふーん……？」

なにかを探るような、底知れぬ響きを持った相槌だった。

決して問い詰めることはしない。

ただ、事実だけを提示して相手の出方を窺うようなその態度は、どんな怒声よりもシロムにとって恐ろしいものだった。

「な、なんですかその目は。言っておきますけど、それは僕のプライベートな物品ですから。勝手に触らないでくれますか？」

さらに防戦を張るように、シロムは言葉を重ねる。

いかがわしい本の内容には一切触れず、あくまで所有権とプライバシーの侵害を主張する作戦に出たのだ。

「プライベート、ね……」

ハイムは再び短く呟き、視線をスッとシロムに戻した。

その表情には相変わらず変化はない。

「そうです。勝手に触らないでほしいと言っているんです。わかりましたか？」

少しだけ早口になってしまったが、シロムは毅然とした態度を崩さずに言い切った。

冷や汗が背中を伝うのを感じながら、姉の反応を待つ。

「ずいぶんと……量のあるプライベートだったわね……」

ぽつりと、ハイムの唇から感情の抜け落ちた言葉がこぼれ落ちる。

積み上げられたいかがわしい本の山を、彼女はただ淡々と見下ろしていた。

「っ……！　だ、だからそれはですね……！」

想定外の角度からの言葉に、シロムはついに言葉を詰まらせる。

懸命に取り繕っていた余裕の仮面が、音を立てて崩れ去りそうになっていた。

「集めるのも、隠すのも、大変そう……」

ハイムはシロムの弁明を聞き入れる様子もなく、ただ事実だけを口にする。

静かな部屋の中で、得体の知れない緊張感だけが重くのしかかっていた。

[Phase.1]性癖を読み上げられる恥辱と苦しい弁明

ハイムは積まれた本の山から、一番上にあった1冊を無造作に手に取った。

表紙のイラストをまじまじと見つめた後、ためらうことなくページをめくる。

パラパラと紙が擦れる音が、静寂に包まれた部屋の空気を不気味に震わせていた。

「『……冷たい金属の管が、少女の無防備なお尻の穴へと宛がわれる。ズブチュッ、と粘膜を激しく押し広げるような音を立てて、器具は肛門の奥深くへと侵入していった』」

ハイムの口から紡がれたのは、一般的な男女の交わりを描いた内容などでは決してなかった。

完全に浣腸や医療プレイのみに特化した、ひどくマニアックな一節である。

感情の起伏が一切削ぎ落とされた彼女の平坦な声が、活字の異常性をより一層際立たせていた。

「『……腸内がグリセリンで満たされていく重苦しい感覚に悶えながら、やがて限界を迎えた括約筋が緩んでしまう。ブリブリと情けない音を立てながら、診察台の上でみっともなくうんちが排泄されていく……』」

　生々しい排便の描写や、浣腸によるおなかの底を突き抜けるような重い感覚が、ハイムのローテンションな声に乗って容赦なく読み上げられていく。

　自分の最も知られたくない秘められた性癖を、よりにもよって双子の姉の口から直接聞かされるという地獄のような光景だった。

「や、やめてくださいハイム！　声に出して読まないでください！」

　あまりの羞恥に、シロムの顔は一瞬にして沸騰したように真っ赤に染め上がった。

　耳の先まで熱を持ち、たまらず両手で自分の顔を覆い隠すようにして叫ぶ。

　頭のなかが真っ白になり、論理的な思考などとうの昔に吹き飛んでいた。

「だ、だから！　それはですね、しょ、将来、医者になりたくて、そのための医学的な勉強の一環としてですね……！」

　もはやなにを言っているのか自分でもわからないほどに混乱し、シロムは口から出まかせの、ひどく苦しい言い訳をまくし立てた。

　医療プレイや浣腸の描写から無理やり「医者」という単語を引っ張り出しただけの、誰が聞いても完全に破綻している理屈だ。

　それでも、自分の非を認めることだけはどうしても避けたかったのだ。

「そう……」

　パタン、とハイムは手元の本を閉じ、ようやくその無慈悲な朗読をストップさせた。

　そして、ベッドからゆっくりと立ち上がり、顔を真っ赤にして激しく狼狽える弟の姿をじっと見つめる。

　双子の姉。

　身長もほとんど変わらないから（1cmだけハイムの方が高いのがシロムには面白くない）、まっすぐと視線で射通される。

　シロムは堪らず、目を逸らして言い訳を続けていく。

「ただの学術的な興味なんですよ。他意は一切ありませんから。わ、わかりましたか？」

　心臓が破裂しそうなほどにバクバクと鳴っているが、シロムはどうにか丁寧な口調を保ちながら言葉を絞り出して弁明を重ねる。

　少しでも弱みを見せれば、この得体の知れない姉になにをされるかわからないという本能的な恐怖がそこにはあった。

「シロムはお医者さんになりたいんだ。ふーん……？」

　ハイムはわずかに首を傾げ、まるでシロムの魂の奥底までをも覗き込むような、深く冷たい視線を向けてきた。

　そのたった一言の短い相槌には、弟の稚拙な嘘などなにもかも見透かしているという、絶対的な余裕と威圧感が満ちている。

　シロムは背中を伝う冷や汗を止めることができず、ただその場で凍りついたように立ち尽くすことしかできなかった。

[Phase.2]シロムの視線と姉の肖像

シロムは呼吸を整えようと必死に胸を上下させながら、目の前に佇む双子の姉、ハイムの姿を睨みつけるように見つめていた。

同じ日に生まれ、同じ年齢であり、同じ家庭で育ち、同じ遺伝子を分け合っているはずの、正真正銘の双子の片割れ。

しかし、その内面は自分とは似ても似つかない、底の知れない灰色に包まれているとシロムは常々感じていた。

ハイムは普段から無口で、感情の起伏がほとんど表に出ないローテンションな少女だ。

学校では美術部に所属しており、いつも薄暗い部室の片隅で、白と黒のモノクロームな絵ばかりを黙々と描いているらしい。

なにを考えているのか分からないミステリアスな雰囲気が一部の男子にウケているようだが、家での彼女を知るシロムからすれば、それはただの「不気味な沈黙」でしかなかった。

家でのハイムは、まるで空気のように気配を消すのが異常に上手く、気がつくと背後に立っているようなことが日常茶飯事だった。

おまけに勘が恐ろしいほど鋭く、シロムが隠し事をしていると、なにも言わずともそのすべてを察知しているかのような視線を向けてくる。

シロムは普段から、ハイムに対して強い苦手意識と、どこか抗えない恐怖心を抱いていた。

姉としての威厳を振りかざして怒鳴りつけてくるタイプであれば、まだ言葉を返して反論する余地もあっただろう。

しかしハイムは違った。

絶対に声を荒らげず、ただじっと観察し、相手が自滅するのを静かに待つような、精神的にジワジワと追い詰めてくるタイプなのだ。

だからこそシロムは、彼女の前では常に完璧に理路整然とした丁寧な態度を崩さないように心がけ、少しでも自分の主導権を握ろうと必死に虚勢を張り続けている。

今日この瞬間も、その防壁は一瞬で粉砕されかけているわけだが、それでもシロムは姉に対する敗北を絶対に認めたくはなかった。

[Phase.3]凍りつく空気と唐突な提案

深く底知れない姉への恐怖と苦手意識から、ほんの一瞬だけ思考の海へと沈んでいたシロムだったが、カサリ、と微かな紙の擦れる音が部屋の静寂を破り、彼はハッと現実の自室へと引き戻された。

視線を前に戻すと、ハイムは先ほど閉じたはずの本の表紙を、指先で所在なさげになぞっているところだった。

無関心を装うような冷淡な表情の裏で、彼女の切れ上がった瞳は、明らかにその本の帯に躍る淫らな文句をちらちらと盗み見ている。

どうやら、普段はモノクロの絵ばかりを描いている風変わりな姉にとっても、弟の部屋から出てきた異常な性質の物品は、それなりに好奇心を刺激するものだったらしい。

「ねえ、シロム」

「な、なんですか……？」

ハイムは本を掴んだまま、感情の起伏が全く見当たらないローテンションな声で、ぽつりと呟くように語りかけてきた。

その視線は本から離れ、じっとシロムの顔の真ん中へと向けられる。

「この本にあるようなこと、実際にやってみたいの？」

突然投げかけられたあまりにもストレートで、かつ意図の掴めない質問に、シロムの思考は完全に停止した。

「……え？」

ハイムが一体なにを言っているのか、その言葉の本当の意味が全く理解できず、シロムの口からは間抜けた疑問の声が漏れる。

てっきり、先ほどの稚拙極まりない「将来はお医者さんになりたい」という苦しい言い訳を、これでもかと理詰めで論破してくるものだと思い込んでいたからだ。

「だから、こういう浣腸とか、実際に女の子とやってみたいのかなって思って」

ハイムは少しも恥じらう様子を見せることなく、淡々と、まるで今日の晩御飯のメニューでも尋ねるかのような気軽さで、信じられない単語を重ねて改めて聞いてきた。

その瞬間、シロムの心臓はドキン、と大きな音を立てて激しく脈打った。

全身の血液が一気に逆流するような、強烈な動揺が彼を襲う。

目の前に座る、この無機質でなにを考えているのか分からない双子の姉の意図を、シロムは必死になって頭の中で探ろうとした。

なぜ彼女はこんな羞恥極まる質問を真顔で投げかけてくるのだろうか。

僕を徹底的に追い詰めて、プライドを粉々に打ち砕いてからかうための、悪質なトラップなのだろうか。

それとも、僕の異常な性癖を面白がって、おもちゃのように弄ぼうとしているだけなのだろうか。

考えれば考えるほど、ハイムの冷徹な瞳の奥にある本心が読み解けず、シロムの背中にはじっとりと嫌な汗が滲んでいく。

「ど、どういう意味ですか……？　そんなこと、ハイムに関係ないですよね」

シロムは必死に声を震わせないよう、いつもの丁寧な口調を維持しながら、防衛本能のままに言葉を絞り出して聞き返した。

これ以上、自分の本心を晒して主導権を握られるわけにはいかないという、精一杯の抵抗だった。

「関係、あるかもしれないわよ」

ハイムは小さく小首を傾げると、表情一つ変えないまま、あまりにも突飛で決定的な言葉を告げた。

「その浣腸プレイってやつ、私とやってみたい？」

[Phase.4]膨らむ妄想と秘められた渇望

ハイムの口から放たれたその言葉は、シロムの胸の奥底で燻り続けていたドス黒い欲望の導火線に、容赦なく火を点けた。

心臓がトクン、トクンと、これまで経験したことがないほどに大きく、そして熱く脈打ち始める。

女の子に、自分の手で浣腸をする。

それはシロムが物心ついた頃からずっと夢に見続け、誰にも、天地がひっくり返っても絶対に打ち明けることのできない、最深部の歪んだ願望そのものだったのだ。

本当は生身の女の子の柔らかいお尻に器具を宛がい、その肛門へと薬液を流し込みたくて、したくて仕方がなかった。

しかし、そんな狂気じみた妄想を現実で叶える手段などあるはずもなく、シロムはただその飢えた欲望を疑似的に満たすためだけに、これらの一見して異常な本を買い集め、夜な夜な自慰行為に耽ることでどうにか自我を保っていたのである。

「……っ」

それを、他ならぬ双子の姉であるハイムを相手にして、本当に叶えてしまって良いのだろうか。

感情の読めない瞳でじっと自分を見つめ、「浣腸プレイ、私とやりたいの？」と、さも当然の日常会話のように重ねて問いかけてくるハイムの前に、シロムは自らのすべての衣服を剥ぎ取られ、魂の形までをも完全に覗き見られているかのような錯覚に陥っていた。

彼の脳裏には、恐ろしいほどの速度で、ひとつの極彩色の妄想が膨れ上がっていく。

もしも、目の前にいるこのハイムに、自分が本当に浣腸を施すことになったとしたら。

弟にナマのお尻を見せて浣腸されたハイムは、この本に描かれている哀れな登場人物たちと同じように極上の便意に悶え、自分の意思とは無関係に、ただただ、溜まったうんちを排泄するしかなくなってしまうのだろう。

抵抗を許されず、なす術もなく、括約筋を緩めていくしかない至高の瞬間。

いつも完璧で、掴みどころがなく、どこか自分を精神的に見下しているかのような態度をとるこの双子の姉に、自分の手で浣腸を施し、そのお尻から無残にうんちを漏らさせてしまうという背徳感。

そんな、夢にまで見たごちそうが、いま自分の目の前に差し出されているのだと理解した瞬間、シロムの背筋を強烈な歓喜の戦慄が駆け抜けた。

客観的に見て、ハイムは誰もが振り返るほどの美少女だ。

整った顔立ちに、冷ややかで神秘的な空気を纏ったその身体に、自分の手で直接、浣腸のノズルを挿入するという行為の持つ意味の重さに、シロムは目眩すら覚えそうになっていた。

[Phase.5]現実を忘れるほどの甘美な肯定

シロムは激しく波打つ胸の鼓動をなんとか押し殺し、乾いた喉をゴクリと鳴らした。

ここで気圧されてしまえば、一生この姉に頭が上がらなくなる。

彼はギリギリのところで踏みとどまり、自分の優位性を保つために、あえて挑発するような薄い笑みを浮かべてみせた。

「ハ、ハイムがどうしてもしてみたいと言うなら、僕がその……浣腸プレイをしてあげてもいいですけど……？」

精一杯の虚勢だった。

どうせいつものように「馬鹿じゃないの」と冷たくあしらわれるか、あるいはさらにからかわれるかのどちらかだと、シロムの理性が警鐘を鳴らしていた。

しかし、返ってきた反応は、シロムの予測を遥か彼方へと置き去りにするものだった。

「うん、興味ある。やってみたい」

ハイムの口から、驚くほどはっきりと、そして迷いのない声が紡ぎ出された。

いつもなら「ふーん……？」と煙に巻くはずの彼女が、まっすぐにシロムを見つめ、明確な意思を持ってその歪んだ提案を受け入れたのだ。

その瞬間、シロムの脳内でなにかが派手に弾け飛んだ。

あまりにも自分の都合が良すぎる、望むべき完璧な答えを引き出してしまった衝撃に、彼の思考は完全に真っ白へと染め上げられる。

嬉しさと興奮の波が一気に押し寄せ、全身の細胞が歓喜で震え出すのがわかった。

女の子に、あの完璧で美しいハイムのお尻に自分の手で浣腸を施し、強制的にうんちを漏らさせる。

そんな妄想のなかの出来事が、今、現実の境界線を越えて自分の目の前に転がり込んできたのだ。

シロムは幸福感に目眩を覚え、視界がぐにゃりと歪むような感覚に囚われていた。

これは本当に現実なのだろうか。

もしかしたら、自分が学校の授業中に居眠りをして見ている、都合のいい夢なのではないか。

そう疑ってしまうほどに、目の前で静かに自分の言葉を待っているハイムの姿が、ひどく非現実的で、それでいて甘美な果実のようにシロムの理性を狂わせていった。

夢なら覚めないで欲しい。この浣腸プレイを終えるまでは。

[Phase.6]隠し持っていた道具と、残酷なすれ違い

「じゃあ、さっそく必要な道具の準備をしといてよ」

　ハイムはベッドからゆっくりと立ち上がると、いかがわしい本の山を見下ろしたまま、ひどく冷たい声でそう命じてきた。

「え……？　あ、はい。わかりました。少々お待ちください……！」

　シロムは裏返りそうになる声で返事をすると、震える手でクローゼットへと向かった。

　そこには、普段から厳重に隠してある、鍵付きの大きめの箱がしまわれている。

　彼は今まで、生身の女の子のお尻に直接浣腸をしたことなど、当然ながら一度もない。

　しかし、いつか訪れるかもしれない奇跡のような瞬間を夢見て、妄想を現実にするための道具だけは、すでに買い揃えてあったのだ。

「……ふーん？」

　ハイムが興味深そうに覗き込んでくる前で、シロムは箱の蓋を開け、隠匿していた秘宝の数々を床へと取り出していく。

「こ、これはですね。あくまで医学的な勉強のために、事前に用意しておいたものなんですけど……」

　苦しい言い訳を重ねながらシロムが並べたのは、ドラッグストアで売っているような可愛らしい市販品のイチジク浣腸などでは決してなかった。

　業務用の500ミリリットル入りグリセリン液のボトルに、無骨で巨大な200ミリリットル用のガラス浣腸器。

　さらに、すべてを漏れなく受け止めるための大人用のおむつや、相手を強制的にM字開脚の姿勢へと固定するための、おぞましい皮製の拘束具までが次々と姿を現す。

「ずいぶんと、お医者さんになる気満々なのね……」

　並べられたあまりにも本格的すぎる道具の数々を見下ろしながら、ハイムは氷のように冷たく、感情の読めない視線を送ってきた。

　しかし、その薄い唇の端は、ほんのわずかに、嘲笑うかのように吊り上がっていた。

「は、はい。ですから、手際よく処置できると思いますから……！」

　ハイムの微かな表情の変化にも気づかず、シロムの胸はわくわくとドキドキで今にも破裂しそうになっていた。

　生まれて初めて女の子に、しかもこの美少女の姉に浣腸ができるのだ。

　ガラス浣腸器の太いノズルをハイムの綺麗な肛門へと挿入し、たっぷりのグリセリン液を浣腸して情けなくうんちを漏らさせる。

　その背徳的な光景を想像するだけで、シロムの頭は完全に沸騰し、有頂天になっていた。

　しかし、舞い上がるシロムは、この時まだ気がついていなかった。

　シロムとハイムの間には、天と地がひっくり返るほどの、とんでもない思い違いがあったのだ。

　先ほど、ハイムは確かに「その浣腸プレイってやつ、私とやってみたい？」と言った。

主語と述語の恐ろしい罠。

彼女が提案した「やってみたい」という言葉の主体。

それは、つまり……。

[Phase.7]錯綜する思惑と沈みゆく意識

床に並べられた妖しくも魅力的な器具を前に、2人はプレイの具体的な内容を決めるため、いったん机を挟んで向かい合わせに座ることにした。

緊迫した空気のなか、ハイムが台所から淹れてきてくれたおいしい紅茶が、2人のマグカップから温かい湯気を立ち上らせている。

普段からは想像もつかないほど気の利いた姉の行動に感謝しつつ、シロムは渇いた喉を潤すように、その芳醇な香りの紅茶を一口、また一口と喉に流し込んだ。

「じゃあ、この道具の使い方、説明してくれる？」

ハイムは温かいマグカップを両手で包み込みながら、ローテンションな声で床の拘束具を指差した。

その視線は相変わらず冷徹だが、どこか未知の領域に対する好奇心を孕んでいるようにも見える。

「ええ、喜んで説明しますよ。これはですね、ただ相手を縛るだけの安物とはわけが違うんです」

シロムは紅茶のおかげで少し落ち着きを取り戻し、自分の内に秘めた歪んだ知識を誇るように、熱を帯びた口調で語り始めた。

女の子に浣腸を施すという夢の舞台を完璧なものにするため、シロムは今までこれらを買い集めてからも、その使用イメージを脳内で何度もシミュレーションしていたのだ。

「この革製のベルトは、受浣者（浣腸される者）の右足首と右手首をしっかりとくくり、そしてもう1本のベルトで左足首と左手首を同じようにくくる構造になっているんです。これを装着すると、人間の身体は物理的に、強制的なM字開脚の姿勢へと固定されてしまうんですよ。お尻や肛門が完全に無防備な状態で、目の前に晒されることになるわけです。これなら、どんなに途中で恥ずかしがって暴れようとしても、絶対に逃げ出すことはできませんよね」

シロムは興奮を隠しきれない様子で、身振り手振りを交えながら熱弁を振るった。

美しいハイムの身体がその拘束具によって完全に開かれ、女性器やお尻を突き出される無残な姿を想像するだけで、彼の背筋にはゾクゾクとした快感が走り抜ける。

「なるほどね……。右と右、左と左を繋いで、お尻を丸見えにするわけだ」

ハイムは紅茶を静かに口に含み、ふーん、と納得したように小さく頷いた。

その顔には怯えも羞恥もなく、ただ淡々とシロムの解説を頭の中で処理しているかのようだった。

「そうなんです。そして一番重要なのが、この200ミリリットルのガラス浣腸器と、500ミリリットルのグリセリン液の調合方法

なんですよ。今回は初めてのプレイですから、市販のたいしたことない浣腸なんかで簡単に済ませてしまうのは、あまりにももったいないと思いませんか？　せっかくなら、その……記念すべき『浣腸処女』は、この200ミリリットル、濃度30パーセントという極上の処方で華々しく散らしたい、というのが僕の希望なんです」

　シロムはさらに熱を込めて、自らの理想とする完璧な調合について力説を重ねた。

　これこそが、彼が数々のいかがわしい本を読み漁って到達した、至高の浣腸理論だった。

「30パーセントっていう濃度は、市販されているイチジク浣腸とかに比べると確かに少し薄いんです。あちらは50パーセントですから……。だけど、その代わりに浣腸する総量が200ミリリットルにもなれば、体内に送り込まれる純粋なグリセリンの総量は60ミリリットルにも達するんですよ。本に書いてあったんですけど、この30パーセントという絶妙な濃度のおかげで、腸壁を刺激しすぎずにおなかも痛くならないんです。それでいて、200ミリリットルという圧倒的な水分量によって、直腸には耐え難いほどの強烈な便意だけが襲いかかる仕組みになっているんです。つまり、痛みによる苦痛ではなく、ただただ純粋に、限界を超えた便意だけを限界まで味合わせることができる処方なんですよ。素晴らしいと思いませんか？」

　シロムは一気にまくしたて、自分の素敵な計画に酔いしれるように、手元の紅茶をまたゴクリと飲み干した。

　生意気な姉のハイムが、おなかの痛みに苦しむことなく、ただただ耐え難い便意に顔を歪め、自分の目の前で大量のうんちをブリブリと漏らしてしまう。

　そんな夢のような結末がもうすぐ手に入るのだという確信が、シロムの頭をさらに狂わせていく。

「へえ……。おなかが痛くならないのに、強烈な便意だけがくるんだ。よく勉強しているのね」

　ハイムはマグカップを机に置き、感心したようにぽつりと言った。

　その瞳の奥で、怪しげな光が静かに揺らめいていることに、シロムは全く気がついていなかった。

「当然ですよ。これくらい当然の嗜みですから。さあ、そうと決まれば、さっそく準備を……」

　シロムは立ち上がって浣腸液の作製を始めようとした。

　しかし、その瞬間、視界が急激にぐにゃりと歪んだ。

「……あれ？」

　なんだか、さっきからどうにも意識が飛びそうなのだ。

　頭が急激に重くなり、鉛でも詰め込まれたかのように思考が全くまとまらなくなっていく。

　身体の芯から急激な脱力感が押し寄せ、自慢の丁寧な口調を維持することすら困難なほど、意識が混濁し始めていた。

「シロム？　大丈夫？」

　ハイムの声が、まるで深い水底から聞こえてくるかのように、遠く、濁って聞こえる。

「な、なんだか……急に、アタマが……」

　シロムは自分の机に手をつこうとしたが、平行感覚の消えかかった腕は空を切り、そのまま上半身が絨毯の床へと崩れ落ちた。

　ハイムが淹れてくれた、おいしい紅茶。

その甘美な香りの裏に隠されていたものに、シロムの鈍麻していく脳はついにたどり着くことはなかった。

視界が急速に暗転していくなか、シロムの目に最後に映ったのは、自分を冷たく見下ろす、ハイムの冷たい瞳だった。

抗う術もなく、シロムの意識は深い闇の底へと完全に落ちていった。

[Phase.8]反転した悪夢

シロムはとても温かい夢を見ていた。

まだ自分が今よりもずっと小さくて、世界がもっと単純だった頃の、幼少時の記憶の断片だ。

夕暮れ時の公園の砂場で、自分とハイムは並んで座り、泥だらけの手で大きな山を作っていた。

沈みゆく太陽の光が、世界をオレンジ色に染め上げていく。

隣にいるハイムは、今と変わらない静かな瞳でシロムを見つめ、小さな手でシロムの泥を優しく払ってくれていた。

なにも恐れるものはなく、ただただ満ち足りた時間が、そこには流れていた。

心地よい温もりに包まれながら、シロムはその幸福な夢の余韻にずっと浸っていたいと願った。

しかし、その穏やかな夕景は、次第に足元からひび割れるようにして崩壊を始めていく。

温かかったはずの空気は急速にその熱を失い、代わりに奇妙な冷気と、肌を刺すような違和感がシロムの意識の表層へと這い上がってきた。

夢の境界線が曖昧になり、深い眠りの底から、現実の感覚がじわじわと引き上げられていく。

完全に目が覚める一歩手前、意識の混濁した暗闇の中で、シロムは自分の身体が置かれている異常な状況を、肌の感覚だけで捉え始めていた。

まず感じたのは、背中に触れるシーツの柔らかい感触だった。

自分の部屋の布団の上に横たわっているのと同じ、慣れ親しんだ布の柔らかさ。

だが、その上に横たわる自分の身体は、あまりにも心許ない。

上半身は剥き出しになっており、下半身もズボンを奪われ、薄い下着のパンツ1枚だけになっている心細い解放感が、皮膚に直接触れる部屋の空気によって生々しく伝わってきた。

そしてなにより奇妙だったのは、四肢の自由が完全に奪われているという事実だった。

なにかしようと腕を動かそうとした瞬間、手首の周りに食い込むような、硬く冷たい感触が強烈な抵抗となってシロムの動きを阻んだ。

それは右の手首と、そのまま同じ側の右の足首を強固に繋ぎ止めている革製のベルトの感触だった。

さらに同時に、左の手首と左の足首も、まったく同じように頑丈ななにかにくくりつけられている。

腕を伸ばそうとすれば足が引っ張られ、足を伸ばそうとすれば腕が固定される。

その構造のせいで、シロムの身体は自分の意思とは無関係に、股を大きく割られた無防備な姿勢——すなわち、強制的

なM字開脚の状態で、布団の上に完全に固定されていたのだ。

なにが起きているのかが分からず、思考は靄がかかったようにひどく鈍いままだ。

なぜ自分はパンツ1枚で、こんな恥ずかしい格好で縛られているのだろうか。

先ほどまでハイムと楽しく紅茶を飲んでいたはずの記憶が、バラバラのパズルのピースのように脳内で浮き沈みしている。

シロムは重い鉛を仕込まれたかのようなまぶたを、拒絶反応を示す身体を叱咤しながら、ゆっくりと、恐る恐る開き始めた。

うっすらと開いた視界の先に、最初におぼろげな光が差し込む。

見慣れた自分の部屋の天井が、徐々に輪郭をハッキリとさせながら映し出されていった。

そして、その視界を遮るようにして、上から自分のことを見下ろしている人物の影が、歪んだ世界の中心に現れる。

「おはよ、シロム」

上空から降ってきたのは、いつもと全く変わらない、抑揚のないローテンションな姉の声だった。

その挨拶の声を鼓膜に受けた瞬間、シロムの脳内に電流が走り、すべての記憶と感覚が一気にひとつへと繋がった。

自分が今、どのような格好をさせられているのか。

右と右、左と左の手足をくくられ、無残にお尻を突き出させられているこの姿勢が、一体なんの道具によるものなのか。

それは他ならぬ、自分がハイムを屈服させるために意気揚々とクローゼットから引っ張り出し、その仕組みを誇らしげに力説した、あの強制M字開脚の拘束具そのものだった。

シロムは一瞬にして完全に覚醒し、全身の血が逆流するような恐怖と屈辱の衝撃に、ただただ目を見開いて硬直するしかなかった。

[Phase.9]ブリーフ観察と残酷な現実

シロムは呼吸を荒くし、身体を激しく捩りながら、目の前の光景を否定しようと必死に叫んだ。

「ど、どういうことなんですか、これ！　僕をどうするつもりですか！」

しかし、ハイムはその必死な問いかけを意にも介さず、シロムの姿をまるで路傍の石でも眺めるかのような冷ややかな瞳で見下ろしている。

「へえ……シロムって、まだブリーフなんだ」

彼女はシロムの羞恥を無視し、淡々とした、どこか心底呆れたような口調でポツリと呟いた。

「っ……！　そ、それは、その……機能的で、動きやすいからです！　べ、別に、子供っぽいとか、そういうのじゃなくて……！」

シロムは顔を真っ赤にし、必死の形相で言い訳を並べ立てた。

自分が愛用している古びたブリーフが、ハイムの冷徹な視線にさらされているという事実だけで、脳が焼き切れるような屈辱を感じる。

「ふーん……？」

ハイムはシロムの苦しい弁明を聞いても、ただ鼻で笑うような相槌を打つだけだった。

「しかも小さいくせにテント張ってる……」

「…な……っっ！？！？？」

言われて初めて気づいた。

シロムは勃起していた。小さな性器がブリーフの中でぴんっと天を仰いでいたのだ。

「朝立ちってやつ……？」

健康な男の子に自然に起こる生理現象で、性的な刺激や夢とは無関係に睡眠中に陰茎が勃起するもの。

「こ、これは僕じゃなくても、誰だって寝てたら勝手になるやつです……！」

「うん。シロムが寝てる時、ブリーフのただの膨らみだった部分が、ぴこんっとテント貼る瞬間みてたし、録画もしてたから」

「な、録画なんて、なに考えてるんですか、この変態姉……っ！！」

シロムは羞恥のあまり顔面を真っ赤に染め上げ、拘束具に繋がれた手足をバタバタと暴れさせながら、声を荒げて必死になって言い返した。

「別に。お医者さんごっこの記録用だし、シロムのその情けない朝立ちの証拠を残しておくだけだから」

ハイムは相変わらず抑揚のないローテンションな声のまま、冷たい瞳でシロムの股間を見つめ直した。

強制的なM字開脚によって、シロムの身体は無防備なありのままを露呈している。

張り詰めたブリーフの布地越しに、お尻の柔らかな輪郭や、中央の不格好なもっこりとした膨らみが、ハイムの視界にこれでもかと焼き付けられていた。

「ふふ、よく見ると……随分と黄ばんでるね。なんだか、おしっこくさいよ、シロム」

ハイムはわざとらしく鼻先で空気を嗅ぐような仕草をし、残酷なまでに無機質なトーンで追い打ちをかけた。

シロムの心臓が、屈辱で潰れそうになる。

清潔に保っているつもりだった下着の隠された汚れを指摘されたことで、彼は自分のプライドが泥のように汚されるのを感じていた。

だが、屈辱はそれで終わりではなかった。

「あ、ここには茶色い筋もある。これって……『ウンすじ』っていうの？」

ハイムは指先で、ブリーフの布地に染み付いた古びた汚れを無遠慮に指し示した。

シロムは全身から血の気が引き、次に沸騰するような熱さに襲われる。

自分の最も卑小で、最も隠したかった汚点が、姉という絶対的な存在に、しかも一番見られたくない角度から徹底的に蹂躙されているのだ。

恥ずかしさと、自分への嫌悪感、そして姉に対するどうしようもない劣等感が混ざり合い、シロムの瞳から堪えきれない屈辱の涙が滲んだ。

「や、やめて……見ないで……！」

掠れた声で懇願するが、ハイムは冷ややかな笑みを深めるだけだ。

「それより、これはどういうことなんですか！　今から僕が、ハイムに浣腸を……僕が、ハイムのお尻にグリセリンを流し込んで、たっぷりと……」

シロムは混乱したまま、自分の本来の目的を再確認するように縋りついた。

しかし、ハイムは冷たく、残酷な一言でそれを遮った。

「……アンタ、なんか勘違いしてない？」

「え……？」

シロムの思考が停止する。

「ど、どういうことですか、ハイム。話が違うじゃないですか」

シロムの視界が恐怖で揺れる。

ハイムは拘束具に固定されたシロムの顔を覗き込み、冷え切った声で淡々と、弟の幻想を切り裂くように告げた。

「誰がシロムに浣腸されるって言ったの？　……私が言ったのは、『その浣腸プレイってやつ、私とやってみたい？』よ。つまり、今からその道具を全部使って、シロムに浣腸してあげるっていうこと」

ハイムの言葉の意味を理解した瞬間、シロムの背筋を凍りつくような戦慄が突き抜けた。

姉が自分の計画を逆手に取り、自分を実験台として弄ぼうとしている。

シロムの勘違いなど、とっくの昔に全てお見通しだったのだと、その冷徹な微笑みがすべてを物語っていた。

[Phase.10]逆転の理不尽と迫る恐怖

ハイムの口から放たれたあまりにも非情な浣腸宣告は、シロムの脳の処理能力を完全に超越していた。

自分が浣腸をされる側の実験台になる。

その事実を理解しようとした瞬間、シロムの頭の中は激しい混乱と猛烈な焦燥感でぐちゃぐちゃにかき乱された。

「え……？　あ、あの、ちょっと待ってください！　なにを言っているんですか、ハイム！」

シロムは両手両足を拘束具に縛られたまま、まるで網にかかった魚のように必死に身悶えし、狂ったように叫び声を上げた。

右の手首と足首、左の手首と足首がそれぞれ強固にくくられているため、暴れれば暴れるほどに、薄いブリーフ1枚に包まれた自分のお尻と肛門が、ハイムの目の前に大きく、無残に突き出される形になってしまう。

その姿勢自体の恥ずかしさと理不尽さに、シロムの心臓は狂ったような速さで脈打ち、冷や汗が全身から滝のように吹き

出していた。

　そもそも、シロムのこれまでの常識のなかでは、浣腸プレイというのは例外なく「男が女の子に対して施すもの」だったのだ。

　事実、彼が自分の部屋のクローゼットの奥底に大切に隠し持っていた『いかがわしい本』の数々でも、あるいはパソコンの裏に忍ばせてあったいやらしいゲームの世界でも、いつだって強制的に拘束され、お尻に器具を挿入されて泣き叫びながらうんちを漏らさせられるのは、決まって可憐な美少女たちの側だった。

　男の子である自分が、される側の弱者になるなんていう発想は、これまでのシロムの人生のなかに微塵も存在していなかったのである。

「どうして……どうして僕がそんなことをされなきゃいけないんですか！　おかしいですよね、そんなの！」

　シロムは自らのプライドの崩壊を食い止めようと、涙目でハイムを強く睨みつけながら、いつもの丁寧な口調をどうにか絞り出して激しく抗議した。

　男子としてのプライドも、姉に対して保ち続けていた優位性も、今やこの屈辱的なM字開脚の姿勢の前にすべて粉々に砕け散ろうとしている。

　女の子を屈服させてそのお尻からうんちを漏らさせるという夢の道具が、まさかそのまま自分を縛り付け、自分の肛門を蹂躙するための凶器へと変貌するなんて、悪夢以外の何物でもなかった。

「おかしくないし……。だって、シロムが自分で言ったんでしょ？『記念すべき初めてのプレイは、200ミリリットルの濃度30パーセントの極上の処方で散らしたい』って」

　ハイムはシロムの取り乱した様子を冷ややかな瞳で見つめたまま、微塵もローテンションな調子を崩すことなく、淡々と床に置かれた巨大なガラス浣腸器を拾い上げた。

　その細く美しい指先が、無骨な医療器具の冷たいガラスの筒に触れる。

　彼女の表情には、怒りも興奮もなく、ただこれから始まる未知の実験を前にした、ゾッとするほど冷徹な好奇心だけが静かに宿っていた。

「そ、それはハイムに対して言った言葉であって、僕の浣腸処女を散らせという意味では……！　やめてください、触らないで！」

　シロムは恐怖で顔を引き攣らせ、必死に太ももを閉じようとしたが、頑丈な皮製の拘束具はビシィッと音を立てて肉に食い込み、彼にさらなる無残なM字開脚を強いるだけだった。

　ブリーフの隙間から完全に露出したお尻の丸みが、ハイムの持つガラス浣腸器の先端を前にして、恐怖で小さく痙攣するようにピクピクと震えていた。

[Phase.11]閃撃のカンチョー

シロムは涙目で首を左右に激しく振り、寝返りを打つように腰を捻ってじたばたと暴れ回った。

しかし、手首と足首がそれぞれ同じ側でガッチリと結ばれたM字開脚の姿勢では、どれだけもがいてもお尻が布団の上で虚しく跳ねるだけで、肝心のハイムから逃れることは決してできなかった。

「ちょっと暴れないで……。シロム。危ないわね……。そんなにばたばたしたら、せっかくのガラス浣腸器が床に落ちて割れちゃうじゃない」

ハイムは手にした大ぶりのガラス浣腸器を、まるで危なっかしい玩具でも扱うかのように軽く振りながら、相変わらず冷ややかで抑揚のないローテンションな声でシロムをたしなめた。

その視線は恐怖に歪む弟の顔から、さらに下方へとゆっくりと移動していく。

「ところで、シロム。シロムが眠っている間に私が服を脱がせたわけだけど、なんのためにこのブリーフだけは、はかせたままだったか、理由がわかる？」

ハイムはシロムのお尻の丸みをパツパツに包み込んでいる、あの黄ばんだ古びたブリーフの布地をじっと見つめながら問いかけてきた。

「え……？　な、なんのためにって……」

シロムの脳内に、新たな戸惑いと不吉な予感が走る。

自分のプライドを徹底的にへし折るために、あえて恥ずかしいブリーフ姿を晒したのではなかったのだろうか。

「考えてみて？　シロムがお医者さんごっこをよく勉強しているなら、すぐにわかるはずよ」

ハイムは小首を傾げ、考える時間を与えるかのように言葉を区切った。

「そ、それは……僕が風邪をひかないようにするための、せめてものお姉ちゃんとしての配慮、ですか……？」

シロムは一縷の望みをかけるように、丁寧な口調で最も無害そうな可能性を口にしてみた。

しかし、ハイムの反応は冷たかった。

「はずれ」

短く一言で切り捨てられる。

「じゃ、じゃあ、おむつをはかせる前に、クッション代わりにしておくためですか……？」

シロムは顔をさらに赤くしながら、次の羞恥にまみれた展開を予想して答えた。

「それもはずれ」

ハイムの瞳には、弟の的外れな解答をどこか楽しんでいるような、底暗い色の光が宿っていた。

「わ、わかりません！　もう意地悪しないで教えてください、ハイム！」

これ以上の屈辱的なクイズに耐えかねて、シロムは拘束具の革ベルトをギチギチと鳴らしながら叫んだ。

「答えはわからない？」

ハイムは静かに、手にしたガラス浣腸器を近くの机の上へと置いた。

「教えてあげよっか？」

そう呟いた直後、ハイムは両手を胸の前で合わせ、人差し指と中指の2本をがっちりと揃えて、まるで忍者が印を組むかのような不気味な構えを作った。

それは、日本の子供たちが日常の悪戯として用いる、あの忌まわしい手の形だった。

「カンチョー！！」

ハイムの鋭い掛け声と同時に、彼女の両手の指先が、狙い澄ました一撃となって空を裂いた。

ズシン！！

「んっっ！？！？？」

シロムの喉の奥から、言葉にならない悲鳴が引き搾り出された。

最初、自分の身になにが起きたのか、シロムの脳はすぐには理解することができなかった。

しかし次の瞬間、お尻の中央、まさにその一点に向けて、地球が激突したかのような凄まじい体感がシロムの全身を突き抜けた。

お尻の奥底が内側から派手に爆発したかのような激しい振動が走り、頭蓋骨の芯までガタガタと揺さぶられる感覚に襲われる。

視界が真っ白になり、目からはチカチカとした星が飛び出すような強烈な衝撃が、脳髄を直接引っ掻き回していった。

その余波は留まることを知らず、お尻の皮膚を突き破って、そのままおなかの最深部、直腸の壁を直接拳で殴りつけられたかのような重苦しい衝撃となってズシズシと響き渡る。

それは、決して切り傷や擦り傷のような鋭い「痛み」ではなかった。

ただただ、生まれて初めて経験する、あまりにも圧倒的で、あまりにも破壊的なお尻への衝撃だった。

時間の感覚が引き伸ばされるなか、シロムの脳は、自分のお尻になにが起きているのかをじわじわと正確に把握し始めていく。

古びたブリーフの布地を媒介にして、ハイムの硬く揃えられた2本の指先が、無防備だった自分の肛門へと容赦なくめり込んでいるのだ。

ギチ、ギチ、とお尻の肉が限界まで押し広げられ、強烈な圧迫感が肛門の周囲を蹂躙していく。

ここで初めて、シロムは自分がハイムの指によって、「カンチョー」を喰らったのだという事実を完璧に理解した。

「あ、は……あうっ……！　か、カンチョー……っ、カンチョーされた……！？」

シロムの口から、屈辱と衝撃に塗れたうめき声が漏れ出す。

意識が混濁した状態から目覚め、M字開脚であり、さらには完全に油断しきっていた彼の肛門にとって、不意打ちで放たれたこのカンチョーの刺激は、通常の何倍もの破壊力を持って襲いかかっていた。

油断していたが故、力無く緩んでいた肛門の粘膜が、ハイムの指の力によって強制的にブリーフごと内側へと押し込まれ、未体験の激しい感覚に震えている。

カンチョーをされたというその一点の事実だけで、シロムの男としての尊厳は完全に木っ端微塵に打ち砕かれていた。

カンチョーの強烈な余韻が、今なお肛門の周囲でジリジリとした熱を持って渦巻いている。

「シロムって男の子のくせにカンチョーされたの、はじめてなの？　薬液を使った本格的な浣腸処女を散らす前に、まずは指でカンチョー処女を散らしてあげようと思ったんだけど……。私のカンチョー、すっごい効いたでしょ」

ハイムはシロムの肛門に深くめり込ませていた指先を、ズブッ、と音を立てるようにしてゆっくりと引き抜いた。

そして、呼吸を忘れて涙を流している弟の顔を、ローテンションながらもどこか満足げに見下ろした。

「これで、さっきの質問の答えがわかったんじゃない？」

ハイムは自分の指先を見つめながら、その理由を淡々と種明かしするように語る。

「ナマの肛門に指を突っ込むのはね、それはカンチョーじゃなくて、ただの指の肛門挿入。カンチョーっていうのは、やっぱりこうして、衣類の上から勢いよく突き刺すものなのよ。だからこそ、そのはき古したブリーフの布地が不意打ちで強烈に肛門にめり込んで、痛みとは違う、なんとも言えない強烈な刺激になるの。ねえ、私の言った通りでしょ、シロム？」

ハイムの解説はシロムにとってこの上ない精神的暴挙だった。

自分がはいていたブリーフそのものが、自分の肛門を最も効果的に蹂躙するための凶器として、ハイムに完璧に利用されていたのだ。

あまりのショックとお尻に残るカンチョーの生々しい余韻に、シロムはただただ、M字開脚の姿勢のまま、ハァハァと荒い息を吐きながら絶望に身を沈めることしかできなかった。

[Phase.12]肛門に刻まれるカンチョーの残響

姉とはいえ、正真正銘の女の子であるハイムからカンチョーを食らったという事実は、シロムの精神を根底から揺るがしていた。

シロムのこれまでの常識において、カンチョーという悪戯は、学校の廊下や泥だらけの校庭で男の子同士がくだらない意地を張り合って突っ込み合うものだとばかり思っていたからだ。

それを、これほどまでに整った顔立ちをした美しい双子の姉に、しかもここまで完璧な不意打ちでやられるなんて、屈辱と恥ずかしさで頭がおかしくなりそうだった。

ハイムの凄まじいカンチョー突込によって、はき古したブリーフの薄い布地は、シロムのお尻の割れ目の奥深く、まさに肛門のデリケートな粘膜の隙間へと容赦なくグイグイと強烈にめり込んだままになっていた。

お尻の穴が異物で押し広げられている生々しい違和感に、シロムは涙目をしながらハァハァと荒い息を吐き出すことしかできない。

「あ、ブリーフが減り込んだままになっちゃってるね。ちょっと引っ張ってあげる」

ハイムは相変わらず感情の起伏がないローテンションな声で呟くと、無防備に晒されたシロムのお尻に再び細い指先を伸ばした。

そして、肛門の最深部に強固に食い込んでいたブリーフの布地の端を指先でつまみ、一気に上へとズリズリと引き抜いた。

ズチュ、と布地が粘膜から剥がれる微かな音が響くと同時に、シロムの肛門の周囲には、これまでに味わったことのないようなゾワゾワッとする強烈な神経の波紋が駆け抜けた。

引き擦られるような摩擦の刺激と、一気に空気に晒された皮膚の感覚が混ざり合い、あまりの背徳的な心地よさにシロムの身体がビクンと大きく跳ね上がる。

「ひぅっ……！？　や、やめてください、ハイム……っ」

情けない声を上げながら、シロムは己の体内の変化に恐怖した。

信じられないことに、カンチョーをされてから時間が経てば経つほど、あの凄まじい衝撃の威熱がじんわりとお尻の奥に広がり、シロムの頑なだった心をとろとろと甘美に溶かし始めていたのだ。

それもそのはずだった。

右と右、左と左の手足を革ベルトで強固に繋がれた強制M字開脚という、肛門を一点の隠し立てもなく完全に無防備に晒しきったカンチョーのための最高の姿勢。

身を守るための防壁は、薄いブリーフたったの1枚だけというあまりにも心許ない格好。

そして、意識を失った状態から目覚めた直後という、これ以上ない完璧なタイミングでの不意打ちの一撃。

これらの良条件が見事に重なり合ったことで、ハイムの指先がもたらした衝撃は、シロムの未熟な肛門の神経へと限界を超えた脳がトロける快感として刻み込まれてしまっていたのだ。

お尻の穴がクチュクチュと勝手に波打つようにぴくぴくと痙攣し、それに連動するように、ブリーフの前の部分に収まった小さなちんちんが、じわじわと熱を持って勃起しそうに硬くなり始めていた。

なぜこんな屈辱的な拷問を受けているだけなのに、自分の性器が破廉恥な反応を示しているのか。

シロムは自らの身体の裏切りに、激しい焦りと絶望を感じずにはいられなかった。

「あー……。やっぱり……。ブリーフのお尻にめり込んでた部分、うっすらと茶色くなっちゃってる……」

ハイムは引き抜いた布地の汚れをじっと見つめ、シロムの顔の真ん前にそれを突きつけるようにして、淡々とその事実を刺激してきた。

「なっ……！　あ、う、うるさいです！　見ないでって言ってるじゃないですか！」

シロムは顔を耳の裏まで真っ赤に染め上げ、必死に首を振って視線を逸らそうとした。

しかし、ハイムの容赦のない言葉によるいじめは、さらにその奥へと踏み込んでくる。

「これって、やっぱりうんちのにおいだよね。すごくクサイよ、シロム」

ハイムはブリーフの布地から指を離すと、今度はシロムの肛門を直接突いた自分の両手の指先を鼻先に近づけ、クンクンと躊躇なくそのにおいを嗅ぎ始めた。

「このパンツ、男の子のにおいじゃなくて、完全にうんちのにおいが染み付いてる。シロム、もしかして便秘でもしてるの？」

双子の姉から、自分のお尻の穴から移ったうんちのにおいを直接指摘され、シロムの尊厳は完全に灰へと帰していった。

完璧で、クールで、自分を見下しているハイムの前で、おしっこくさいブリーフにうんちの筋をつけ、指にそのにおいまで残してしまっているという究極の恥辱。

シロムはただただ、真っ赤になった顔から涙をこぼし、緊縛された姿勢のまま、これから始まる本番の浣腸プレイへの恐怖にガタガタと震え続けることしかできなかった。

[Phase.13]ハサミでブリーフを切られて直視される肛門

お尻の奥底に残る強烈なカンチョーの余韻と、指先から移ったうんちのにおいを指摘された究極の恥辱により、シロムの精神は完全に疲れきっていた。

しかし、ハイムの容赦のない冷徹な支配は、これっぽっちも緩む気配を見せなかった。

「さてと……。衣類の上から不意打ちするカンチョーはこれで終わりだから、このブリーフはもう用済みね」

ハイムは近くの学習机の引き出しから、工作用の一際大きくて切れ味の良さそうなハサミを取り出し、金属音を小さくチャキリと響かせながらベッドサイドへ戻ってきた。

「な、なにを……なにをするつもりですか、ハイム！　そのハサミをどこに向けるつもりですか！」

シロムは恐怖に目を見開き、拘束具に繋がれた手足を必死にばたつかせたが、その度に革ベルトがギリギリと肉に食い込むだけだった。

「だって……。シロムが自分で調達したこの拘束具、右と右、左と左をガッチリ固定して強制的にM字開脚の姿勢にする優れものじゃない。そのせいで、お尻を完全に開いたまま、ブリーフを普通に下にずらして脱がせることが物理的にできない構造になってるの……。だから、こうしてハサミで切り開くしかないの」

ハイムは冷ややかで抑揚のないローテンションな声のまま、パツパツに張り詰めたシロムのブリーフの脇の縫い目に、冷たいハサミの刃先を躊躇なく差し込んできた。

チョキ、チョキ、と硬い布地が断裁されていく不気味な音が、シロムの耳元に容赦なく届く。

「やめて……お願いだから、それ以上は本当にダメですってば……っ！」

シロムの懇願を無視して、ハイムのハサミは左右の腰回りを綺麗に切り裂き、最後は股間の布地を真っ二つに分断した。

ぱさり、と力なく床に落ちる布切れ。

ついにシロムを隠していた最後の防壁が完全に消失し、彼の最も破廉恥な部分が、部屋の冷たい空気に一気に晒されることとなった。

「へえ……。カンチョーされて、うんちのにおいまで指摘されたのに、シロムのこれ、ぴんっと元気に勃っているんだね」

ハイムはハサミを机に置くと、無防備に剥き出しになったシロムの股間へと、その冷徹な視線を真っ直ぐに落とした。

そこには恥辱と恐怖に震えながらも、初体験の強烈な肛門刺激によって完全に興奮し、上を向いてカチカチに硬くなっているシロムの小さな性器が、哀れに脈打っていた。

「ち、違うんです！　これは、僕の意思じゃなくて……身体が勝手に、その……！　見ないでください、そんな不躾な目で凝視しないで……！」

シロムは顔面を沸騰したように真っ赤に染め上げ、涙目で激しく首を振りながら丁寧な口調の言い訳を叫んだ。

だが、ハイムの関心は、その小さな性器よりもさらに奥にある、最も秘められた最深部へと向けられていた。

「性器もだけど、やっぱり本番はこの肛門よね。すごい……さっきのカンチョーのせいで、お尻の穴、ピクピクと細かく痙攣し続けているよ」

ハイムはシロムのお尻の割れ目を指先で少しだけ左右に押し広げ、露出したデリケートな肛門の様子を、まるで理科の実験動物でも観察するかのような詳細な感想を口にし始めた。

「あ、や……っ！　触ら、ないで……お尻を、そんなふうに見ないで……！」

シロムはお尻の穴に走るぞわぞわとした感触に身悶えし、腰を浮かせようとしたが、固定された手足のせいで、より鮮明に肛門をハイムの眼前に差し出すことしかできなかった。

「それに、さっきのカンチョーの刺激のせいで、お尻の奥にあるうんちが、すぐそこまで降りてきているのが丸見え。シロムの肛門、締まりが悪いおバカな穴になっちゃってるよ。これから200ミリリットルのグリセリン液が流れ込んでくるのに、こんな状態で耐えられるわけないじゃない」

ハイムの無慈悲な指摘が、シロムの脳内に致命的な恐怖を植え付ける。

「そんな……嘘です、僕は耐えられます！　だから、もうその最悪の医療プレイの準備を止めてください……！」

シロムは必死に虚勢を張ろうとしたが、ハイムはただ「ふーん……？」と冷たく見下すだけで、次の本格的な処置のために、巨大なガラス浣腸器を再び手に取るのだった。

[Phase.14]調合される処方と直腸への切っ先

シロムの最も秘められた最深部である肛門を容赦なく観察し終えたハイムは、まるで日常の作業を淡々とこなすかのように、学習机の上に広げられた道具へと向き直った。

彼女は用意していた洗面器を取り出すと、シロムがクローゼットから引っ張り出してきた業務用の500ミリリットル入りグリセリン液のボトルを傾けた。

トポトポと不気味な粘り気を持った無色透明の液体が、正確に60ミリリットル計り取られて洗面器へと注がれていく。

続いて、あらかじめ用意してあった水道水を140ミリリットル、そこに躊躇なく加えた。

「シロムの言った通り、これで合計200ミリリットル。濃度30パーセントの、特製のグリセリン浣腸液のできあがりね」

ハイムはガラスの棒を使い、洗面器の中の液体が完全に均一になるよう、シャカシャカと無機質な音を立ててよくかき混ぜた。

目の前で、自分を蹂躙するための恐ろしい浣腸液が冷徹に調合されていく光景を見つめながら、シロムは恐怖で歯の根がガタガタと震えるのを抑えられなかった。

「や、やっぱり止めてくださいハイム！　そんな大量の浣腸液、僕の身体に入れるなんて絶対に狂ってます！　毒です！」

「狂ってないわよ。シロムが自分で、この濃度が一番おなかが痛くならなくて、強烈な便意だけを楽しめる極上の浣腸処方だって力説したんじゃない」

ハイムは少しも表情を変えないまま、今度は無骨で巨大な200ミリリットル用のガラス浣腸器を手に取った。

そして、洗面器に溜まった30パーセントの浣腸液の中へと先端を浸し、ジュウウウ、と重苦しい音を立ててシリンジを引き、200ミリリットル全ての浣腸液をガラスの筒の中へと一気に吸い上げた。

ずっしりとした重量感を持つ、透き通った浣腸液が満ちたガラス浣腸器。

ハイムはその冷たいガラス製のノズルの先端に、潤滑用のローションをたっぷりと指先で塗り付け、ヌルヌルとした卑猥な輝きを持たせた。

「さあ、シロム。お医者さんごっこの本番を始めようか。これからアンタのお尻の穴に、この大量のグリセリン液を全て注ぎ込んで、忘れられない浣腸してあげるから」

ハイムはガラス浣腸器を両手でしっかりと保持すると、強制M字開脚の姿勢で完全に無防備に晒されたシロムのお尻の間へと、ゆっくりと膝をついて近づいてきた。

そして、ローションで濡れそぼったガラス浣腸器の先端のノズルを、ピクピクと怯えるように痙攣しているシロムの肛門の真ん中へと、冷酷にピタリと宛がった。

「ひぅっ……！？」

冷たいノズルの感触が肛門の粘膜に触れた瞬間、シロムは背筋を強烈な戦慄が駆け抜け、悲鳴のような声を上げた。

まだ浣腸は挿入されていない。

いつでもこの浣腸を肛門に挿入し、薬液を注入して、シロムの腸内を絶対的な便意で満たし、強引に浣腸を完了させることができる状態のまま、ハイムは動きを止めてシロムの涙目の顔を見下ろした。

「……っ、ハイム、本当にお願いします、それだけは……！　僕は本で読んだ知識で知っているだけで、本当に浣腸なんてされたことないんです！　そんな太いガラス浣腸器の先を入れられたら、僕……！　僕……」

男子なのに浣腸されるなんて……。

シロムは自らの未経験と恐怖を包み隠さず吐き出し、丁寧な口調を維持しながら必死に許しを請うた。

これまで本やゲームの中の女の子たちが泣き叫びながら浣腸されていたあの恐怖を、今まさに自分が身をもって体験しようとしているのだ。

「知識だけはあるのに、本物の浣腸は初めてなんだ。ふーん……？　じゃあ、いま、どんな気分？　これからこの太いガラ

スの管がシロムの肛門の奥深くまで突き刺さって、200ミリリットルの液体で極限まで浣腸される直前の気分は？」

　ハイムはシロムの焦りと恐怖を煽るように、かなりドSっぽく、いたぶるような低いローテンションの声で言葉責めを重ねてきた。

「最悪です……！　恥ずかしくて、怖くて、死にそうです……！」

「恥ずかしさで死ぬ人なんていないから……。ただただ、限界までうんちを漏らしたくなるだけ。ねえ、シロム。もしも、これ以上このノズルを奥に突っ込まれたくなくて、今すぐ浣腸されるのを勘弁してほしいなら……」

　ハイムはシロムの顔を覗き込み、極めて残酷で、かつ甘美な罠のような提案を口にした。

「『お姉ちゃん、僕に浣腸してください』って、可愛い声で私におねだりしてみてよ。もしちゃんと言えたら、本当に浣腸するかどうか、少しは考えてあげてもいいよ？」

「なっ……！？」

　シロムはあまりの精神的羞恥の要求に、言葉を失った。

　いつも自分を見下してくる姉を「お姉ちゃん」と呼び、あろうことか自分から「浣腸してください」と懇願しろというのだ。

　そんな屈辱的なセリフ、口が裂けても言えるはずがなかった。

「言えないんだ。じゃあ、容赦なく浣腸を進めるね」

　ハイムは冷たく告げると、肛門に宛がっていたガラス浣腸器のノズルに、じわりと体重をかけて真っ直ぐに押し進めた。

　ヌチュリッ！

「んあっっ！？」

　湿った、そして肉が強制的に押し広げられる音が、静かな部屋に生々しく響き渡る。

　ローションの滑りを伴いながら、太いガラス浣腸器の先端のノズル部分が、油断しきっていたシロムの肛門の奥へと、全く抵抗なく、だけど強烈な異物感の刺激を伴ってズブズブと、確実にめり込んでいった。

[Phase.15]屈服の懇願と冷徹な切断線

　ヌチュリッ、という湿った肉の摩擦音とともに、ローションで濡れそぼった太いガラス浣腸器のノズルが、シロムの無防備な肛門の奥へとさらに深くめり込んでいく。

　それは決して鋭利な刃物のような痛みではなかったが、未成熟なシロムのお尻の粘膜を容赦なく押し広げ、直腸の壁を内側から強烈に圧迫する、生まれて初めて体験する未知の重量感だった。

　もう、これ以上ノズルを進める必要はない。

　ハイムの細い指先が、ガラス浣腸器の末端にあるシリンジ（押し子）にしっかりと掛けられており、彼女がほんの少しでもそこに力を込めれば、今すぐにでも200ミリリットルの冷たいグリセリン浣腸液が、シロムの体内に一気になだれ込んでくる状態だった。

シロムは本で読んだ知識として、グリセリン浣腸液が直腸に注入されたらなにが起きるかを完全に理解していた。

ひとたびあの無色透明の化学薬品が体内に流れ込めば、直腸の粘膜は猛烈に刺激され、自身の意思とは全く無関係に、限界を超えた強制的な便意が引き起こされる。

200ミリリットルという量は、決しておなかをパンパンに膨らませるような物理的な量ではない。

だが、その30パーセントという絶妙な濃度がもたらす激しいグリセリン反応は、シロムの体内に溜まっているうんちを狂ったように呼び覚まし、一瞬で「うんち漏らし確定」の地獄へと彼を突き落とすに十分すぎる威力を秘めているのだ。

浣腸される＝ハイムの前でブリブリとうんちを漏らして完全敗北する。

その最悪の未来が脳裏をよぎり、シロムは恐怖と焦燥感で頭がどうにかなりそうだった。

「どうしたのシロム？　そんなに怯えて、お尻の穴をきゅうきゅうと締め付けちゃって……。ガラス浣腸器を握る私の手にまで、アンタの肛門の震えが伝わってくるよ？」

ハイムはシリンジに指をかけたまま、微塵もローテンションな調子を崩すことなく、冷え切った瞳でシロムを見下ろした。

「ねえ、もう一度だけ聞いてあげる。今すぐこの強烈な浣腸されて、私のお膝の上で無様にうんちを漏らしたくないなら……なんて言うべきか、わかるよね？」

ハイムはまるで出来の悪いネズミに芸を仕込むかのような無機質な声音で、先ほどの屈辱的なセリフを再び要求した。

「『お姉ちゃん、僕に浣腸してください』って、可愛い声で泣きついてみせてよ。もしちゃんと言えたら、本当にいま浣腸するのだけは、免除してあげないこともないよ？」

その言葉を聞いた瞬間、シロムのなかに残されていた最後の男の子としてのプライドが、猛然と反発の炎を上げた。

「い、言うわけないじゃないですか……っ！　そんな恥ずかしいセリフ、絶対に嫌です！　僕は絶対に屈しませんから……！」

シロムは涙目でハイムを強く睨みつけ、ガタガタと震える唇を噛み締めながら、丁寧な口調のなかに必死の拒絶を込めて叫んだ。

いつも見下してきて、いつかお仕置きしてやろうと長年想っていた双子の姉に向かって、「お姉ちゃん」と呼び、さらに「浣腸してください」などと自ら求めてみせるなど、男子として、弟としての死を意味する。

絶対に言わない、絶対に持ち堪えてみせる——そう自分に言い聞かせ、シロムはお尻の穴を必死に窄めようとした。

だが、ハイムはそのシロムの頑なな態度を、ただフッと鼻で笑うだけで一蹴した。

「ふーん……？　じゃあ、言葉はいらないね。今すぐ浣腸してあげる」

ハイムの細い指先が、一切の躊躇なくガラス浣腸器のシリンジをグッと力強く押し込み始めた。

ピストンが動き、ガラスの筒の中から透明なグリセリン浣腸液の先端がシロムの肛門の奥へと、わずかにニュルリと侵入していく感覚がリアルに伝わってくる。

「ひっ、あ……ッ！？！？！？」

ほんの数滴、薬液が粘膜に触れただけで、シロムの直腸にゾクゾクとした不穏な熱が走り、油断していたおなかの奥が

ズシンと重くなった。

　これが浣腸。

　生まれて初めてされる浣腸。

　本当にされる。

　このまま押し切られたら、一瞬で自分の全てが終わり、うんちまみれの奴隷にされてしまう。

　限界ギリギリの恐怖がシロムの理性を完璧に叩き潰し、彼はプライドも尊厳もすべてを投げ捨てて、狂ったように叫んでいた。

「わ、わかりました！　言います！　言いますから止めてください、ハイム……っ！！」

「じゃあ、早く言って？　私の指、もう止まらないよ」

　ハイムはシリンジをわずかに押し進める手を緩めることなく、冷酷にカウントダウンを強いる。

「お、おねぇちゃん……っ！　ぼ、僕に、浣腸して……くださいぃっ……！！」

　シロムは顔をぐしゃぐしゃに歪ませ、涙とよだれを垂らしながら、人生で最も恥ずかしく、最も破廉恥な懇願の言葉を、可愛い声を絞り出して叫び、ついに、ついに完璧に屈服した。

　部屋の中に、弟が姉に浣腸をねだるという最悪に背徳的なセリフが虚しく響き渡る。

　シロムは強制M字開脚の姿勢のまま、ハァハァと激しい息を吐きながら、これでどうにか最悪の注入だけは免れるかもしれないと、縋るような目でハイムを見上げた。

　しかし、ハイムの唇から溢れたのは、シロムの淡い期待を無残に切り裂く、底冷えのするような薄い笑みだった。

「……うん。よく言えました。シロムがそんなに可愛い声で、私に『浣腸してください』って心からおねだりしてくれたんだもの。……お姉ちゃん、拒否する理由なんて、どこにもないよね？」

「え……？　あ、あ、あああ……っ！？」

　シロムが絶望に目を見開いた瞬間、ハイムの両手は、ガラス浣腸器のシリンジを根元まで一気に、力強く押し込んだ。

　ジュブチュウウウウウウッッ！！！！

　200ミリリットルもの濃厚なグリセリン浣腸液が、凄まじい勢いでシロムの肛門から直腸へと一気になだれ込んでいく。

　言葉通りシロム自らの「おねだり」によって、破滅の浣腸プレイが完全なる幕を開けたのだった。

体験版はここまでです。

よろしければ続きの製品版もお読み頂ければ嬉しいです。